



木や花に、塩水がかかるとなぜかれるの

塩や塩水は、水を吸い出すはたらきがある

キュウリなどの野菜をきざんだものに、塩をかけると、野菜から水が出てきて、野菜はフニャツとなり、かさが小さくなります。これは、野菜の細胞を包んでいる膜（細胞膜や細胞壁）が、水を通すため、塩が、細胞の中の水を吸い出してしまったのです。

また、塩などがたくさんとけたこい水と、少しとけたうすい水が、細胞膜のような半透膜（水にとけている物は通さず、水だけ通す性質をもつ膜）で間を仕切られていると、うすい水のほうから、水が、こい水のほうに移動します（これを浸透作用といいます）。植物は、この浸透作用を利用して、土の中から、根毛を通して水や養分を体内に取り入れれたり、根からくきへと移動させたりしています。

塩水は、葉や花をいためる

塩水がかかると、水がかわいた後に残った塩が、植物の幹やくき、葉や花にべったりはりつきます。うすい皮をもつ葉や花は、水分を取られてしおれ、塩がついた部分の細胞がだめになってきます。根もと近くにかかった塩水は、土の塩分を増やすため、根毛が、水や養分を吸収できなくさせてしまいます。

塩が、植物の呼吸するあなをふさぐ

また、植物は、葉の裏や木の皮に呼吸をするあながあって、そこから、動物と同じように、酸素を取り入れ、二酸化炭素をはき出しています。このあなが塩でふさがれると、息ができなくなって、弱ってきます。（監修・矢野 亮）

